

# 月刊 中東レポート

第91号

発行 ウニタ書舗  
 東京都千代田区神田神保町1-52  
 電話 (03) 3291-5533  
 編集 J.R.A.  
 郵便振替 東京1-48443  
 三菱銀行神保町支店 当座9012656  
 会員制 年会費24,000円

新世界秩序こそ矛盾と混乱の元凶

61

## 新世界秩序こそ矛盾と混乱の元凶

一九九三年六月一〇日

国際的な貿易摩擦と政治的混乱、とりわけ米国クリントン政権内の混乱、支持率と経済の低迷は、アメリカ帝国主義の一元的な世界支配を目指した新世界秩序の先行きを暗示しているとも見られている。こうした世界的な混乱の波は第三世界の一部である中東にものしかかり、新たな再編に向けた激動を予知している。

「全面的パートナー」を強調し、交渉の進展に向けた積極的な役割を吹聴していたクリストファーをして、第九次交渉の進展のなさへの不満を漏らさせた。アラブ諸国代表団は一様に進展のなさ、米国の約束の不履行を批判した。そして、

シャフィー・パレスチナ団長の、交渉の中止提言、パレスチナ国民会議(PNC)議長の交渉批判と辞任発表によって、第一〇次交渉は成立しないと観測された。だが、六月六日のアンマンでの前線諸国外相会議は、第一〇次への出席を前提とした声明を採択した。

米国高官が、米国の利益第一の発言をし、アラブ諸国からの反発を招いた。ムバラク・エジプト大統領が米国を批判し、サウジの内相も西側(米国をさす)を批判した。そうしたなかで、「アドハ・ショック」とも、「エルサレム・サブライズ」ともよばれるリビア巡礼団のエルサレ

ム訪問がなされ、メカではファハド国王が巡礼団へのメッセージとして、「対立をやめ共存を!」と訴えた。

被占領地内でも、ファタハ・マス共同作戦と「共同軍事声明第一号」の発表と「武装闘争を含めた反占領闘争の拡大をよびかけ」。他方で、F・セイニ氏やファタハによる〈ゼネスト〉は人民の利益に合致しない、停止を!〉といふよびかけ。

今号では、こうした混乱に焦点を当てて展開してみたい。

### — アドハ・ショック — 新世界秩序へのなだれ込み？

ラビンが、「エルサレムは統一したもの」としてイスラエルの首都であり、交渉の対象ではない」と発言し、米国高官が相次いで、米国の利益を第一にした外交政策(中東に関しては石油の確保とイスラエルの安全が最優先)を発表して、パレスチナ人民はもちろんのこと、アラブ、

資料  
 リンティニアードを拡大し、パレスチナ国家領土を打ち固めよ (抄)  
 一〇組織声明 (抄)  
 PFLP中央委声明 (抄)  
 レバノンのパレスチナ人 (抄)  
 条件改善ではなく、交渉からの撤収こそが必要 (抄)  
 急展開の入植活動 (抄)  
 公表されたパレスチナ提案 (抄)  
 特別レポート — 被追放者たちの現状  
 被占領地の現状  
 重要日誌(一九九三年五月一日～六月一〇日) : 15

イスラム全体から非難の声があがつた。が、その後、リビア人がエルサレムを訪問するという発表がなされた。「九」名の巡礼団はカイロからバスでイスラエルに向かい、国境（ガザのラファーハ）でイスラエルの観光相らの出迎えを受け、アラブ、世界をびっくりさせた。

リビア側は、サウジが巡礼団の飛行を受け入れなかつたので、エルサレムへ行くことにした、と弁明した。だが、サウジ側が反論したように、リビアはメッカ巡礼団を約六〇〇〇人も送っているし、エジプトやトルコのようなイスラエルと国交のある国でさえ、巡礼団をエルサレムへ送るということはしていないのだから、リビアの弁明はまったく奇異、というより、眞の意図が別のところにあるのは明白であった。

この巡礼団のエルサレム訪問は——かつてイラン・コントラ事件の一部、イランへの武器援助で暗躍したサウジのカショギとイスラエルのニムロディの二人の武器商人が五年も前からそうした交渉、裏工作を続けてきた。リビア生まれのイスラエル人、R・ペレなどがカダフィー氏と直接に交渉し、カダフィー氏のこの巡礼団に対する承認があつたばかりか、リビア生まれイスラエル人のリビア訪問やカダフィー氏の年内のエルサレム訪問すら計画されている。「米国も反対しなかつた」（イスラエル外務省）、などなどが、明るみに出された。

リビアの意図は、イスラエルとの関係をもつて、米国内シオニスト・ロビーそして米政権との関係の回復、すなわちロカビー事件などを口

**二 米国外交政策の矛盾・混乱**

五月二七日の（エジプトの半官紙）アル・アラム夕刊が、ムバラクが「（ニューヨークの貿易センター爆破との関連を云々述べている）シェーク・アブデル・ラハマンに関する有効な情報のすべては、ソビエトをアフガンから追い出す米国の努力を支持していたペシャワール時代から、彼がCIAのエージェントであったことを明確にしている」「彼は今も毎月給料を受け取っている。彼のビザは誤って出されたのではない。それは彼の（CIAへの）奉仕の結果である」「今、CIAとFBIの間で違いが起こっている」と語ったことを報じた（数日後、この報道は、記者団の発言をムバラクの話として書いたミスと修正されたが、誰もそんなミスを信用していない）。

米国は、貿易センター爆破などのすべてをイランに結び付けようと必死になつていて。だが、皮肉にも、原理主義者を追及していくと、「アフガニーズ」として知られる諸組織、すなわち、アルジェリアでも、チュニジアでも、エジプトでも、ヨルダンでもまったく同様で、「アフガニーズ」とCIAとの深い関わり、サウジの資金援助などが露呈してくる。

それゆえ、米国はエジプトなどを利用して反イラン・キャンペーンを展開しようとはするが、エジプトなどの捜査力要請には応えようとはしない。応えると米国の面子が潰れる事態にな

イスラム全体から非難の声があがつた。が、その直後、リビア人がエルサレムを訪問するという発表がなされた。一九「名の巡礼団はカイロからバスでイスラエルに向かい、国境（ガザのラファーハ）でイスラエルの観光相らの出迎えを受け、アラブ、世界をびっくりさせた。

リビア側は、サウジが巡礼団の飛行を受け入れなかつたので、エルサレムへ行くことにした、と弁明した。だが、サウジ側が反論したように、リビアはメッカ巡礼団を約六〇〇〇人も送っているし、エジプトやトルコのようなイスラエルと国交のある国でさえ、巡礼団をエルサレムへ送るということはしていないのだから、リビアの弁明はまったく奇異、というより、眞の意図が別のところにあるのは明白であった。

この巡礼団のエルサレム訪問は——かつてイラン・コントラ事件の一部、イランへの武器援助で暗躍したサウジのカショギとイスラエルのニムロディの二人の武器商人が五年も前からそうした交渉、裏工作を続けてきた。リビア生まれのイスラエル人、R・ペレなどがカダフィー氏と直接に交渉し、カダフィー氏のこの巡礼団に対する承認があつたばかりか、リビア生まれイスラエル人のリビア訪問やカダフィー氏の年内のエルサレム訪問すら計画されている。「米国も反対しなかつた」（イスラエル外務省）、などなどが、明るみに出された。

リビアの意図は、イスラエルとの関係をもつて、米国内シオニスト・ロビーそして米政権との関係の回復、すなわちロカビー事件などを口

実とした制裁の解除を目指したものと言ふよう。多国間交渉の部会をチュニスやモロッコが開催しようとしており、それを契機にイスラエルとの実質上の国交を狙つていている。そうした動きのなかで、リビアも、新世界秩序のなかにその足がかりを作つておこうとしたのである。

アラブ、イスラム世界からは、この巡礼に激しい批判、非難がなされた。とりわけ、パレスチナ人は、彼ら巡礼団に対し、「アル・アクサ・モスクは巡礼団ではなく、解放者を必要としている」という非難の声があがつた。者をはじめとしてあちこちから、「この訪問はイスラエルのエルサレム占領、先日のラビン発言を承認するもの」という非難の声があがつた。ブエズ・レバノン外相も、「これはアラブの統一した立場への背後からの一撃であり、和平過程を妨害する行為」と非難した。ハズバラードの著者ルシディ氏の死刑を宣告したように、ファトワ（イスラムの宗教指導部）は「裏切り行為」でカダフィー氏暗殺の認可をするよう、要請がなされたりさえした。

だが、PLO指導部は、公的な批判を控えた。その理由は、PLOの職員の大幅な解雇が予定され、その被解雇者をリビアのキャンプに送るとアラファト議長が発表していること（五月二〇日）、リビアのPLOへの財政支援を失いたくないこと、といったPLOの財政危機に一因がある。と同時に、「この間のアラファト議長の政策展開にこそ、もっと大きな理由がある。パ

ここでは、カダフィー氏のカケは非常に危険を伴うものであることを付け加える。米国が反カダフィー派の育成をし、その転覆を狙つてゐることは周知の事実である。今回の巡礼団の衝撃はリビア内でも波紋を引き起こしている。これで反カダフィー派にとって格好の口実ができる。ただし、それこそがCIAの狙い目だった、と言えるからである。

ここでは、カダフィー氏のカケは非常に危険を伴うものであることを付け加える。米国が反カダフィー派の育成をし、その転覆を狙つてゐることは周知の事実である。今回の巡礼団の衝撃はリビア内でも波紋を引き起こしている。これで反カダフィー派にとって格好の口実ができる。ただし、それこそがCIAの狙い目だった、と言えるからである。

米国の中東政策が、極端にイスラエル寄りで、アラブ側に敵対的であることが明確にされたなかでこうした雪崩をうつ現象は、米国が、反イスラム、反原理主義を分界線として、推進している政策＝新世界秩序の方向への成功の印と見るのも、同じ流れのなかにある。

アラブ側に敵対的であることが明確にされたなかでこうした雪崩をうつ現象は、米国が、反イスラム、反原理主義を分界線として、推進している政策＝新世界秩序の方向への成功の印と見るのも、同じ流れのなかにある。

レスチナ内部から「妥協に次ぐ妥協」と非難されている政策を正当化するために、「いけにえの羊」が必要だった。カダフィー氏の衝撃的な行動は、アラファト議長にとってはまさにアラブに恒例の「いけにえの羊」だった」といふ見方がパレスチナ内などにある。各国が新世界秩序のなかでの個別の延命を求めているのに呼応した、アラファト議長の政策だ、と。

〈対立、対決はなにも生み出さない、平和的な行動は、アラファト議長にとってはまさにアラブ・ボイコットの解除を宣言した（六月八日）のも、同じ流れのなかにある。

この間、米政権内から、何度か、米国の外交政策は米国の利益第一とすべきであるという発言がなされても、訂正されるということが起こっている。その主張によれば、中東における米国の利益とは石油の確保とイスラエルの安全保障であり、米国はイスラエルとの戦略的同盟を中心とし、対原理主義でのトルコの役割を重視する、という。つまり、アラブは「単なる石油の供給国で、ただ米国に従え！」という、ラビンの訪米時に明確にされた論理で、同じ頃、「ウソつき」日本と「恩知らず」の産油国とも言わされたが、そうしたことがいつそう、明確にされたのである。

こうしたことがアラブ諸国から歓迎されるわざで、ガザの入植地近くの路上で、野菜の売買をしていた一團へ、通りかかった車から射撃がなされ、イスラエル商人一人とパレス

### 三 パレスチナ内部の矛盾

五月一六日、ガザの入植地近くの路上で、野菜の売買をしていた一團へ、通りかかった車から射撃がなされ、イスラエル商人一人とパレス

チナ人一人が死亡した。これは、ファタハとハマスが共同で担った作戦で、同日の発表は、  
「同作戦は、五月二日のブレイジ・キャンプでのファタハ・メンバー暗殺と、エジプト国境でのハマス・メンバー殺害への報復として、両組織が共同で担った」と述べた。さらに、二三日には、「共同軍事声明第一号」(文書)が発表され、  
「占領軍への武装闘争とインティファードの拡大こそがテロリスト＝ラビンへの回答である。人民の統一と闘いの拡大をよびかける。二人のパレスチナ人の死者に対する責任ある対応をする。こうした殉教を繰り返さないためにも、人民は闘いの標的となるところに近づかないように」とよびかけた。

これはシオニスト側にはショックだった。封鎖による安全確保という宣伝が崩れたこともあらが、それ以上に、ラビンの政策展開が、分裂させんと狙っていた、ファタハとハマスの共同作戦へと導いてしまったからである。

二〇日には、シャフィリ交渉団長が、前日のラビンの「エルサレムは統一したものとして、イスラエルの首都であり、交渉の対象ではない」という発言を批判し、こうしたあり方が交渉の進展のなさを作り出しており、  
「和平過程の構造的な修正が必要、それまで討議を停止するようよびかけた。

それを受けたかのように、六七年の占領に反対し、追放第一号となつた、シェーク・アブデル・サイードPNC議長が、「今われわれに押しつけられているものは平和ではなく、投降で

ある。和平過程への参加にはなんらの利益もない。私は、ふりかかっている害毒のすべて、米国とイスラエルが押しつけている投降とパレスチナ人民の分裂を受け入れたという歴史的な非難を被ることはしたくない」と辞任を表明した(二二日)。

だが、他方では、こうした動向と真逆の動きも示された。PNC議長の辞任発表と同じ日、一部のグループから交渉継続への支持が発表され、シャフィリ氏の発言に対して、F・フセイニ氏が、「彼の個人的見解である。継続するかどうかは指導部が決めることであつて、こうした発言をすべきではない」と批判した。さらに、フセイニ氏が、そして被占領地内ではファタハ名で、「ゼネストは、パレスチナの経済と人民の生活にマイナスにしかならないから、これを停止せよ」というよびかけがなされた。アラファト議長は、ハマスはイランの手先という非難を繰り返し、他方で、オーストリヤ首相を経由して、ラビンに「秘密裏でも、公然とでも会談する用意がある」と伝える書簡を託したことを見表。さらには、「ガザ第一論」を主張するラビンとほぼ同様の意見を展開した。

こうしたことから、「PLO主流派内、とりわけファタハ内で混乱が起こっている」と多くの紙誌、論説はとらえている。

二〇日に、アラファト議長が、PLOの財政困難を理由に肥大化した官僚機構を整理し、約三分の一に当たる人員をリビア南部のキャンプに送ると発表。二四日には、BBCインタビュー

までの号でも触れたが、米英に次ぐイスラエルの第三の輸出市場としてあつた西岸、ガザの購買力が封鎖の影響で縮小し、イスラエル産業全体に大きな影響を与え、安い労働力の不足からくるインフレの増大がイスラエル社会全体を襲っている。ラビンの占領継続＝鉄拳政策の破綻は、そうしたところにも現れている。

ラビンは宗教右派のシャスによる左派のメレツ非難を利用して、交渉で強硬姿勢を示し、国会内では右派をも巻き込んだ安定政権の確立を目指した。「エルサレムは交渉の対象ではない」、「ガザの実験的撤退(いわゆるガザ第一)論」、「撤退には国民投票で」などの一連の発言は、米政権内の強硬発言に支えられていることもあるが、そうした内政上の意図もあった。が、連立工作はうまくいかなかつた。逆に、いつそ更新している。ラビンは「封鎖がイスラエルに安全をもたらした」と強調しているが、ファタハ・ハマスの共同作戦をはじめとして、占領軍に対するさまざまの闘い、爆弾、砲砲、ナイフ攻撃は連日のように、加えて火炎瓶や車への放火、そして各種の大衆行動が展開されている。六月五日、第三次中東戦争の開始記念日には、イスラエル、パレスチナ双方から約一〇〇〇人がガザの検問所に集結し、占領や封鎖などを非難した。

パレスチナ人の安い労働力に依存してきた建設業や農業が大きな影響を受けていることはこ

で交渉團の一人が、「PLOに代わるパレスチナの指導部を形成しようという試みがある。交渉反対派も選択を」とよびかけた(実は、こうした動きは米国の策動に乗ったもので、反対派に云々というのは、それを粉飾するためのものでしかない)。六月に入つて、PLOがヨルダン内の診療所の閉鎖、給料の三ヶ月間凍結、被占領地の殉教者の家族への手当の停止などを実行したことが報道された。これらも、財政問題を理由としているが、ファタハ内の矛盾のせいだとも言われている。

同時に、「こうしたファタハ内の矛盾を利用として、アラファト議長は、パレスチナの解放というPLO憲章はもとより、和平会議の基本をも投げ捨て、自らの妥協路線を推進しようとしている。

PLOに代わるものとされる米国の提案に沿っているのは、他でもなくPLO議長本人で、それがリビア巡礼団への対応、ガザ第一論でのラビンと同様の発言として示された。アラファト議長は、ガザを内戦状況にせんとするラビンの思惑と合致した動向を展開するのか、とレバノン紙などは批判している。

クリントン政権の中東政策、リビア巡礼団をはじめとするアラブ側の対応、とりわけパレスチナ内部の矛盾は、ラビン政権をしていつそう強硬な姿勢をとらせるに至っている。だが、それは人民の怒りをいつそうかきたて、反米国内では、再び、しかも、新任の国際援助機関責任者をはじめ、クリントン政権内からも、イスラエルへの援助のあり方を見直すべきという声が出ている。

イスラエルの副外相ペイリンは、「もし今日の状況で何回も(交渉の)継続が可能かと問われたら、私の答えはイエスである。だが、こうした方法で(和平や合意への)突破口が開けるかと問われたら、答はノーとなる」と語った。シオニストの利益を押しつけようとした。シオニストの本質を暴露し、眞に人民の統一を作りだし、逆に敵内部の矛盾、混乱を拡大させるような闘いこそが必要である。国際情勢は示している。投機的、個別の野望、党利党略としての政策展開ではなく、人民の総意と利益を実現していく政治展開(それこそ民族利益の実現と国際的な連帯を創り出す)の大切さ

三日には、「共同軍事声明第一号」(文書)が発表され、「占領軍への武装闘争とインティファードの拡大こそがテロリスト＝ラビンへの回答である。人民の統一と闘いの拡大をよびかける。二人のパレスチナ人の死者に対する責任ある対応をする。こうした殉教を繰り返さないためにも、人民は闘いの標的となるところに近づかないように」とよびかけた。

これはシオニスト側にはショックだった。封鎖による安全確保という宣伝が崩れたこともあらが、それ以上に、ラビンの政策展開が、分裂させんと狙っていた、ファタハとハマスの共同作戦へと導いてしまったからである。

二〇日には、シャフィリ交渉団長が、前日のラビンの「エルサレムは統一したものとして、イスラエルの首都であり、交渉の対象ではない」という発言を批判し、こうしたあり方が交渉の進展のなさを作り出しており、「和平過程の構造的な修正が必要、それまで討議を停止するようよびかけた。

それを受けたかのように、六七年の占領に反対し、追放第一号となつた、シェーク・アブデル・サイードPNC議長が、「今われわれに押しつけられているものは平和ではなく、投降で

ある。和平過程への参加にはなんらの利益もない。私は、ふりかかっている害毒のすべて、米国とイスラエルが押しつけている投降とパレスチナ人民の分裂を受け入れたという歴史的な非難を被ることはしたくない」と辞任を表明した(二二日)。

だが、他方では、こうした動向と真逆の動きも示された。PNC議長の辞任発表と同じ日、一部のグループから交渉継続への支持が発表され、シャフィリ氏の発言に対して、F・フセイニ氏が、「彼の個人的見解である。継続するかどうかは指導部が決めることであつて、こうした発言をすべきではない」と批判した。さらに、フセイニ氏が、そして被占領地内ではファタハ名で、「ゼネストは、パレスチナの経済と人民の生活にマイナスにしかならないから、これを停止せよ」というよびかけがなされた。アラファト議長は、ハマスはイランの手先という非難を繰り返し、他方で、オーストリヤ首相を経由して、ラビンに「秘密裏でも、公然とでも会談する用意がある」と伝える書簡を託したことを見表。さらには、「ガザ第一論」を主張するラビンとほぼ同様の意見を展開した。

こうしたことから、「PLO主流派内、とりわけファタハ内で混乱が起こっている」と多くの紙誌、論説はとらえている。

二〇日に、アラファト議長が、PLOの財政困難を理由に肥大化した官僚機構を整理し、約三分の一に当たる人員をリビア南部のキャンプに送ると発表。二四日には、BBCインタビュー

で交渉團の一人が、「PLOに代わるパレスチナの指導部を形成しようという試みがある。交渉反対派も選択を」とよびかけた(実は、こうした動きは米国の策動に乗ったもので、反対派に云々というのは、それを粉飾するためのものでしかない)。六月に入つて、PLOがヨルダン内の診療所の閉鎖、給料の三ヶ月間凍結、被占領地の殉教者の家族への手当の停止などを実行したことが報道された。これらも、財政問題を理由としているが、ファタハ内の矛盾のせいだとも言われている。

同時に、「こうしたファタハ内の矛盾を利用として、アラファト議長は、パレスチナの解放というPLO憲章はもとより、和平会議の基本をも投げ捨て、自らの妥協路線を推進しようとしている。

PLOに代わるものとされる米国の提案に沿っているのは、他でもなくPLO議長本人で、それがリビア巡礼団への対応、ガザ第一論でのラビンと同様の発言として示された。アラファト議長は、ガザを内戦状況にせんとするラビンの思惑と合致した動向を展開するのか、とレバノン紙などは批判している。

クリントン政権の中東政策、リビア巡礼団をはじめとするアラブ側の対応、とりわけパレスチナ内部の矛盾は、ラビン政権をしていつそう強硬な姿勢をとらせるに至っている。だが、それは人民の怒りをいつそうかきたて、反米国内では、再び、しかも、新任の国際援助機関責任者をはじめ、クリントン政権内からも、イスラエルへの援助のあり方を見直すべきという声が出ている。

イスラエルの副外相ペイリンは、「もし今日の状況で何回も(交渉の)継続が可能かと問われたら、私の答えはイエスである。だが、こうした方法で(和平や合意への)突破口が開けるかと問われたら、答はノーとなる」と語った。シオニストの利益を押しつけようとした。シオニストの本質を暴露し、眞に人民の統一を作りだし、逆に敵内部の矛盾、混乱を拡大させるような闘いこそが必要である。国際情勢は示している。投機的、個別の野望、党利党略としての政策展開ではなく、人民の総意と利益を実現していく政治展開(それこそ民族利益の実現と国際的な連帯を創り出す)の大切さ

を、改めて教えていふと言えよう。

## 資料

### インティファーダを拡大し、パレスチナ国家領土を打ち固めよ（抄）

民族統一指導部による、よびかけ、  
第九五号

〈われらが英雄的な人民、大衆へ〉  
英雄たちへ

〈封鎖と飢餓に直面しつつ、堅忍不抜を示す英雄たちへ〉

不抜性と堅い決意をもつて、インティファーダは確実に占領を打ち負かし、民族目標、帰還、自決、エルサレムを首都とする独立パレスチナ国家建国への道を進んでいます。

テロリストラビンは、われらが人民に対する流血の犯罪を日々展開している。奴らは、追放、無差別乱射、ミサイルを用いた家屋破壊、人民の飢餓状況とインティファーダの根っこを絶つという目的をもつて封鎖を継続している。われらが人民は、敵の殺人とテロ、抑圧、弾圧と対決し、敵こそが敗者であることを証明している。闘いの拡大と殉教者の血は、占領がなんら実りのない事業であることを知らしめる。暴力、流血、テロの拡大は、占領者のツケを高くするばかりである。

占領者が展開している二重包囲は、エルサレム、聖なる都市を囲い込み、パレスチナ本体から切り離すことを狙っている。が、エルサレム

は、われらがパレスチナの土地の不可分の一部であり、われらが人民、アラブ、イスラム諸国民は、独立パレスチナ国家の首都として保証されないような解決を受け入れることはありえない。

民族統一指導部（以下、UNL）は、一部の（古い）被追放者の帰還を彼らの権利として歓迎するものの、そうした権利は他のすべての被追放者に、離散のわれらが息子たちのすべてに共通することであります。なによりも決議七九九の即刻の遵守の必要性を、再度主張する。

〈われらが英雄的な人民、大衆へ〉

われらが労働者は封鎖と飢餓との苦悩の下で

メーデーを迎えた。われらが労働者が仕事に行くことを阻止するのは、だが、両刃の剣としてあり、それはイスラエルの利益を害し、占領に対する反乱を強化し、それを打倒する大衆的な憤激を拡大する。これを機に、われらが諸施設や農場、土地にしつかりと立脚せん。人民を飢餓に追い込み、郷土から出て行くように仕向けている敵の企と対決せん！

UNLはまた、国際社会に対しても、われらが包囲下の人民への責任と、われらが諸施設、生産的なプロジェクトが失業させられた労働者たちを救済できるような支援を、よびかける。

〈われらが人民、大衆へ〉

今日の困難な状況は、社会的な連帯を深化させ、飢餓と家、郷土から追い立てるシオニストの策謀に対決し、よりいそう生産的なプロジェクトに民族的な投資を行い、英雄的な人民、労

働者の労働の機会を創出し、家族的、社会的連帯の諸委員会を形成することの必要を示していきます。UNLは、占領当局が、われらが首都、エルサレムへの通過をも許可制にする政策への拒否を明確にするとともに、パレスチナの民族的諸施設、機関と国際社会がエルサレムへの通過を祝福されたインティファーダの人民へ

敵は、自由と独立をモットーとするインティファーダとパレスチナの民族的團結の質を認識し、この生き生きとした武器を破壊しようと人間内部の違い、矛盾、分裂を作りださずさまざまな試みを展開している。UNLは、われらが人民がこの困難な時期に、民族的な統一の絆を深化させるようよびかける。民族的團結は、

「自治」策動に対するパレスチナの闘い、インティファーダを高揚させ、占領を打ち負かす源泉である。

（UNLは以下を確認する）

\* UNLは、われらが人民と攻撃部隊が、インティファーダの拡大をもって、パレスチナ国家の領土を、逆にイスラエルと入植者どもに對して閉鎖するよう、よびかける。

\* われらが人民大衆が、パレスチナを分割、分断しようとする、敵の陰謀、策動のいっさいを拒絶するよう、よびかける。

\* 占領者が設けているエルサレムへの障壁を打破する大衆的な行進を、よびかける。

\* 人民内部の問題を解決するのに、民族的な粉飾をもって、暴力を正当化する風潮に警告を發

される合意は人民を拘束する力を有しはしない。この決定の結果として、われらが大義やインティファーダに影響を及ぼすことへの責任のすべては、PLO「指導部」と交渉團にこそある。われわれは、民族的團結を強固にして、インティファーダを拡大することを第一とする。したがって、戦士たちが「和平」過程への立場の違いを理由にした同胞攻撃をしないよう、よびかける。敵は、PLO「指導部」と交渉團にこそある。

弱体化するという、邪悪な目的に機会を与えるためにも、これは必要である。

われらが大衆、戦闘的勢力が一〇組織を支持し、その戦闘的、政治的行動を發展させ、さまざまな策謀に對決するようよびかける。われわれは、パレスチナ、アラブ、イスラム諸国の大衆に、敵シオニストが、われらが人民を代表もしていない部分を通して成し遂げようとしている抹殺計画、陰謀のすべてを打ち破るまで闘いとジハード（聖戦）を続けることを約束する。われわれは、あらゆる形態の闘いの強化と戦闘的行動、とりわけ軍事の共同と發展の必要性を確認する。

（一〇組織は以下の遂行をよびかける）

1、被占領地の各地において、大衆的集会を組織し、われらが人民の交渉への拒否を表明し、抹殺計画、陰謀を暴露すること。

2、被追放者の家族と大衆による、交渉團の家などへの抗議のデモを。

3、離散下のキャンプで大衆集会などを組織

する。現場の戦士たちがそうした暴力行為を停止させ、市民や財産を破壊することを目指す者を摘発し、処罰するようよびかける。

\* 撤退を考察せるに至っている英雄的なガザの人民を称える。戦士たちの闘い、敵と入植者どもとの対決を高く評価する。

\* 民族產品で代替可能なイスラエル產品のボイコットの再度のよびかけ。それを取り扱う流通業者に警告する。攻撃部隊はこうした違反者の摘発と適切な措置を。

\* 諸施設、工場の所有者や支配人は、労働者の権利を尊重するようよびかける。

（われらが人民、大衆へ）

UNLは以下の実行をよびかける。

一五月一日、シンポージュームなど労働者の日を称えよ。労働組合は労働と救済問題の研究を。

一五月八日、封鎖に反対し、インティファーダの拡大とエルサレムへ向けた大衆的行進を。

一五月九日、インティファーダの六六カ月目、ゼネスト。

一五月一三日、パレスチナ国家からの孤立を阻止する、エルサレムでのゼネスト。

一五月一五日、パレスチナの略奪の記念日。敵兵士、入植者どもとの対決とパレスチナ旗掲揚を。

一五月五、六、一四、一六、二五各日は、商店の全日開店。

（その一） 九三年四月二五日  
あらゆる現場で占領軍や入植者どもとの対決を。  
民族統一指導部 九三年五月五日

### 一〇組織声明（抄）

（被占領地内外のパレスチナ人民、大衆へ）  
（アラブ、イスラム諸国の大衆へ）

（アラブ、イスラム諸国の大衆へ）  
（一〇組織は以下の遂行をよびかける）

1、被占領地の各地において、大衆的集会を組織し、われらが人民の交渉への拒否を表明し、抹殺計画、陰謀を暴露すること。

2、被追放者の家族と大衆による、交渉團の家などへの抗議のデモを。

3、離散下のキャンプで大衆集会などを組織

すること。

4、第九次交渉が開始される四月二七日をゼネストの日とし、被占領地では反占領の闘いの強化、われらが離散の人民は多様な活動展開を。

\*われらが神聖な大義と戦闘的な人民に対する、すべての陰謀を打ち破らん！

\*祝福されたインティファーダに榮光と勝利を！

\*われらが殉教者に榮光を！ 獄中者には自由を！ 被追放者には一括 即時の帰還を！

〈その二〉 九三年五月五日  
〈郷土内の、そして離散のパレスチナ人民、大衆へ〉

〈アラブ、イスラム諸国の大衆へ〉

被占領地内のわれらが大衆は、決意も高く、反占領の闘いを展開している。今、インティファーダは六六カ月目へと入らんとし、弾圧、殺人、封鎖、追放などのありとあらゆる策謀、敵シオニストの手による数々の殉教者にもかかわらず、いつそう先鋭に、より炎を高くしている。

輝けるインティファーダは、持続性と犠牲性を通して、敵シオニストに対する闘いと戦闘の叙事詩を形成し、「自治」陰謀、パレスチナ問題の抹殺という米国リシオニストの企画に対し、真の打撃を与えていた。

ファッショ的、人種主義的なシオニストのインティファーダを消滅させようという企てや試みを拒否している、われらが人民の意志を尊重

することなく、「指導部」と交渉団は敗北の道、幻想の流布の政策を突き進んでいる。領内のわれらが人民が、封鎖下におかれ、各種の犯罪が

展開されているというのに、彼らは「自治」の権限へ至る第九次交渉を行っている。

四月二七日のゼネストは大衆の総意として交渉拒否を示し、今、インティファーダは六六カ月目に入らんとしている。一〇組織はわれらが人民にあいさつを送るとともに、より注意深くワナにかかるよう、よびかける。

三〇人の（古い）被追放者の帰還はまったく当然な権利としてあり、これをマドリッドリワントンの破滅的な路線の「成果」なるものに、すり替えることに警告する。

マルジ・アッズホールの被追放者の確固とした立場、一括帰還の主張、その堅忍さにあいさつを送る。

〈被占領地内外のわれらがパレスチナ人民、大衆へ〉

パレスチナ一〇組織は以下をよびかける。

1、交渉から即刻の撤収を！ 交渉団によるいかなる結果もなんら有効性はない！

2、アラブ、イスラム諸国の大衆と世界の世論に、われらが人民の闘いと正当な大義への理解と、敵シオニストの殺害行為に對決する、インティファーダの拡大への支援をよびかける。

3、すべての諸勢力や人権団体に、シオニストの人種主義的ファッショ的行為を非難するよう、よびかける。

国家の建設という民族目的を達成することにつながる。

第七、中央委は、一〇組織の抹殺陰謀との対決にあいさつを送るとともに、占領に對決するあらゆるレベルの共同活動の強化、拡大を促進、強化し、「自治」リ抹殺計画との対決をより有効にするよう、よびかける。

中央委は、被占領地内外のわれらが大衆、獄中者、追放者、殉教者とその家族にあいさつを送り、同時に、民族の大義と目的を貫徹するための闘いを拡大していくことこそが唯一の方途であることを、よびかける。

力を高める広範な活動を展開すること、国際社会には物質的、精神的支援を要請する。

第五、米リイスラエルの抹殺計画に反対する闘いの拡大のため、DFLPとの協力を軸に、民主的民族的勢力の結集と主導性を發揮する。

第六、インティファーダを支援し、抹殺計画と対決し、民族的な闘いと團結を強化するためにも、包括的な民族対話をよびかける。それは、PLOをはじめとするわれらが人民の獲得物を防衛し、インティファーダと民族的闘いを拡大し、帰還、自決、エルサレムを首都とする独立国家の建設という民族目的を達成することにつながる。

第七、中央委は、一〇組織の抹殺陰謀との対決にあいさつを送るとともに、占領に對決するあらゆるレベルの共同活動の強化、拡大を促進、強化し、「自治」リ抹殺計画との対決をより有効にするよう、よびかける。

第一、占領と弾圧に反対するあらゆる形態の闘いの拡大を。

第二、シオニストの策動と対決するため、自由と独立のスローガンを掲げ、闘うこと。

第三、シオニストのテロと国際規範への違背と闘っているパレスチナ人民への、国際社会による保護を。

第四、パレスチナ諸勢力、諸機関は人民の活

るようよびかける。

4、PLOを含めた民族的な獲得物を保持するためにも、内外からの内部対立を作ろうとする策謀を打ち破り、民族的團結を強化することの重要性を再確認する。

5、インティファーダの六六カ月目に際して、以下の活動をよびかける。

A、被占領地内部で

① 活動と対決の拡大。

② 交渉団員の家の前での座り込みを展開し、現状の交渉への参加への拒否を表明せん。

B、離散の地で

・輝かしいインティファーダの拡大と連帯し、支援する政治的大衆的活動を。

五月一五日、パレスチナ略奪の日、被占領地の内外を問わず、ゼネストを。

二〇日、AIN・カラの虐殺の日。

一被占領地内では、対決の拡大の日。

・在外では、各種の大衆的政治行動を。

五月一七日、追放六カ月目、ならびに五月

・被占領地内では、対決の拡大の日。

う法を（部分修正）再確認した。

第二に、先にも書いたが、内戦難民への対策

上でもレバノン人との違いが明確である。

第三に、最も危険なのが、一部のレバノン人の中には、レバノンに隣接していた七つの町村からの三万五〇〇人に国籍を与えるという方向がある。サイクス・ピコ条約で、これらの町村がレバノン領とし、レバノン独立の際にもそうしたというのだが、これは国際的には承認されていないし、決議四二五と矛盾する。

（UNRWAはその計画に違背している）

パレスチナ難民に関する国際的な責任機関、UNRWAは国連決議一九四に沿って、帰還の権利、物質的・精神的損失への賠償の方向をもつて、難民支援を任務としている。

UNRWAは、財政上の縮小、活動の縮小となっている。同機関の一部の人物（残念なことにそれがパレスチナ人だが）は、財政の私的な流用、コネによる職責付与、さらには、それらと関連して、非パレスチナ人の登用などをした。

こうした状況のなかでUNRWAは九一年に新しいレバノン責任者を任命したが、彼の任務は新たな登録証の発行に代表される難民再登録であった（レバノンはこれをパレスチナ国民の証明とみなし、自らの政策の正当化を利用している）。

彼はまた、腐敗との闘いというスローガンをもって、同機関の整理、財政縮小を展開した。人民委員会と人民の代表団は、登録証の発給を

必要なのは、国連が採択したパレスチナに関する諸決議を基礎とした交渉である。

基本的なことは以下である。

一、いかなる中東和平過程においてもパレスチナを無視することは不可能である。パレスチナ問題は中東対立の中心問題である。その中心問題の解決を抜きにした、いかなる解決も成功や持続はしない。対立の原因がなくならないからである。

この事実を回避した努力は長くは持続しない。パレスチナ指導部は、マドリッドの条件を受け入れる前に、国民會議（PNC）や中央評議会（PCC）が行った規定に沿うために、この問題に留意すべきだった。指導部は、この問題への尊重を通して、米・イスラエルの主導下の現在の交渉を変えることができた。イスラエルとの「戦略的同盟」関係にある米国の主催ではなく、国連の主催する国際会議とした。

二、中東は、米国にとって戦略的に重要である。

この地域は世界の三分の二の石油貯蔵量を有し、世界全体にとって経済の要の一つである。

米国はこの石油のコントロールを、世界経済を牛耳るために必要としている。

中東はまた、製品輸出と危機に瀕している米国経済を活性化しうる、大量消費市場でもある。アジア、ヨーロッパ、アフリカ三大陸の接点にあるという中東の地理的な位置も、米国の要因の一つである。

三、交渉でのイスラエルの強硬姿勢は戦術とし

拒否した。が、同機関は同身分証の発給を開始。

まず同機関の職員に新しい登録証の発給を行い、次にパレスチナ職員に登録証の配布を強制した。

また、彼は、当初拒否していた人民委員会との会見では、パレスチナ人職員を防衛隊として動員し、紛争はパレスチナ人とパレスチナ人の問題であると言いくるめた。さらに、職員を使って、パレスチナ指導部との問題は、個人的な利害からのもの、人民委員会も政治指導部も人に選出されていないなどと流布させた。

この責任者は、最初の声明では、パレスチナ国家の世代を育て云々と言った。が、彼はパレスチナの地をイスラエルと書き、新たな採用者はパレスチナ人ではなかった。人民の怒りを口実（！）に、彼は、ボディガードを組織し、自らのアパートの階下に彼らを住ませ、ホテルのフロア全体を予約し、……という状況で、こうしたあり方はキャンプの再建活動を停止させ、別の諸問題を作ることになっている。

（パレスチナ指導部との問題）  
在レバノンのパレスチナ指導部は、パレスチナ人民の権利の防衛と発展に関する、レバノン政府との、あるいはUNRWAや他の機関との対応に第一の関心を置かなければならない。

だが、PLO指導部の一派は、彼らの政治的利益を第一としたあり方になっている。赤三日月社は名目だけ、犠牲者の家族への支給は二ヶ月間停止など。

こうした確信の代わりに、指導部は、インティファーダを政治的に利用し、米国への恐れで黙屈辱的条件下での参加に合意したパレスチナ指導部は、われらがパレスチナ人民、アラブ民族が民族的権利を結実させる能力を有していることに確信を持つたほうがいい。

### 急展開の入植活動（抄）

アル・シャープ紙、六七五〇号

先週、西エルサレム市当局は、東エルサレムのダウントン再建計画を発表した。被占領地

イスラエルの入植活動に関する数少ないパレスチナ専門家H・トウファジ氏に質問した。

新しく計画が発表されたが、その目的は？ 通過する二つのハイウェイ計画も発表された。イスラエルは建設、道路開設、町作り計画なるものも発表している。その目的はパレスチナ地区

である。同様に、批判派も、問題の解決に責任を有している。「指導部批判」だけでは十分ではない。重要なことは、人民の権利と利益を防衛することにあるからだ。

地方の指導者がキャンプ外で生活するということ、あり方への批判も起っている。極論すれば、彼らにはキャンプの人民を代表しえないのである。

（最後に）

われわれ内部の問題を、隠すのではなく、それを含めて解決していくことこそが、真にパレスチナ人民を救うこと（P.F.五回大会に沿うこと）にならう。

条件改善ではなく、交渉からの撤収こそが必要（抄）

M・A・リップ紙、九三年五月一四日会員）、アル・コップ紙、九三年五月一四日

のすべてを防衛することはPLO指導部の責任

の不利益を改善できると、一部の人は考えている。そうした人々は、交渉とパレスチナ側の条件改善を目指している。彼らが討議していることとは重要だけど、それは現段階で必要なもの

である。そうした人々は、交渉とパレスチナ側の条件改善を目指している。彼らが討議していることは重要だけど、それは現段階で必要なもの



ることは言うまでもないし、それらに対する彼らの即刻の記者会見は人民を勇気づけている。物理的制約はあっても、彼らはまさに人民と一体なのである。

新古今集

アドハ（いけにえ祭）もないガザの実情（抄）  
ガザ、AP、九三年五月三一日

ガザではアドハの祝日に恒例のいけにえの差の数もない。誰も、花輪、新しい服、祝日用のお菓子を期待してはいない。

1993年7月31日 第91号

月刊 中東レポート

の数も少ない。誰も、花輪 新しい服 初田用のお菓子を期待してはいない。

イスラエルが被占領地の封鎖を開始してから二ヶ月がたち、多くの家族は、イスラエルの六年間の占領のなかで、日々最長記録を更新している封鎖による貧困と闘っている。

A・マハムード（三一歳）は魚の行商人だが、二、三日前に、妻の金のネックレスを宝石店へ持つていってお金に換えた。彼が買ったのよりはほぼ三〇〇ドル安い九五〇ドルを受け取ったが、それはアドハの祝賀パーティー用ではない。「私は七人の子供があり、まえの祝日のときから着ている物を、新しい物へと変えてやらねばならない」と、彼は語った。彼は、新鮮な角をテルアビブの高級レストランへ売りにいったが、今はそれができない。

「私たちは、殉教者の家族を訪問するし、被迫害者の家族を訪問する。それで終わりさ。他の国では人々は歌い、踊る。だが、私たにそうした

あるいは親戚からの借金で何とかしている。三〇歳のサミーは、彼の蔵書を担保にほぼ八〇ドルを手にし、小さな店を開いた。小麦粉、食用油、塩、駄菓子、タバコといった日常の基礎的な物を扱っている。が、平均的な現金売上は日に一五ドル位だという。

## 水問題とパレスチナ人（抄） 〔その二〕

は、八〇%がエルサレムやイスラエル内で働いていた。今は、ほとんどが失業状況にある。二〇年以上に渡つてイスラエルでの労働とその賃金は経済の主流になつてきていた。M・イサウイ（六五歳）は、「あまりにも長い間、白らの土地を無視し、イスラエルの通貨シエツケルを追い求めてきた。息子たちはエルサレムやテルアビブでの農場や建設作業で稼ぐことができた。が、われらが三〇エーカーの土地は休耕状況になつた。今それを耕作すべきときだ」と語る。だが、農業には水が不可欠である。西岸の可耕地の四分の一しか耕作されてはい

ないが、それは水の欠乏の故である。二六年間のイスラエル統治の下で、パレスチナ人の水使用は五〇%ほど上がったが、農業用の水は停滞したままである。イスラエルが制限しているからだ、と彼らは言う。

パレスチナ全域の水系は絡み合っている。イスラエルは四分の一の水を西岸の山岳部に降った雨に依っている。イスラエル側は、ユダヤ難民の受け入れという歴史的人道的な使命のために、その権利を主張する。そして、国際的にも、イスラエルの主張に有利なように、上流国家の独占権を否定している。

パレスチナ人の水利学者J・イサークは、「イスラエルは水問題で非常に有利な条件をもち、水源を過剰に搾取している。われわれに、われわれ本来の水の権利を、そうすればわれわれは自らの問題を解決できる」と語る。

ガザでは人口の過密状況とそもそもその水の欠乏の故に、飲み水が健康を害するレベルにある。和平交渉で水問題の解決の必要性がようやく確認される方向にきたと言われているが、イスラエル側は、現状の水源については不間にし、新たな開発において共同管理を主張している。

実際、ヘブライ大学の教授は「現存する水資源を分けようというのは話しにならない。唯一の解決は全体に必要なものを外部から追加すること」

## 重要日誌

一九九三年五月一一日～六月一〇日

### 五月一一日

- ・被占領地、軍への発砲、兵一人負傷。
- ・交渉、パレスチナ側が原則宣言案を提案（資料参照）。
- ・南部、レジスタンスの攻撃、SLA一人死亡、イスラエル兵一人負傷。

### 五月一二日

- ・ガザ、人民の鬭い、二人死亡三三人負傷。他方ナブルスで、イスラエル兵への攻撃、二兵士負傷、銃を奪取。
- ・南部、レジスタンスの攻撃、SLA保安責任者死亡。

### 五月一三日

- ・人民の鬭い、一人死亡三〇人負傷。他方、軍への手投げ弾二件、五兵士負傷。
- ・交渉、これといった進展のないまま第九次終了。アラブ各国团长はイスラエル、米のあり方を非難。米も進展のなさに失望。
- ・南部、レジスタンスの攻撃。
- ・サウジ、人権運動関係者を公職追放。

### 五月一四日

- ・ガザ、三日間のゼネスト、人民の鬭い。
- ・南部、レジスタンスの攻撃、パ・ゲリラ一人死亡、SLA一人死亡。

### 五月一五日

- ・アラファート、米国案はイスラエル提案のコピー。  
　　○組織などからは、交渉撤収の声拡大。
- 索と三〇人の逮捕。
- ・イスラエル創設四周年への抗議)。他方  
手投げ弾攻撃、四兵士負傷。占領軍は家宅侵入
- 五月一六日
- ・ハマス・アタハ共同作戦(本文参照)。  
民の闘い、子供二人殺され、二九人以上負傷
- ・南部、レジスタンスの攻撃一つ。
- 五月一七日 追放六カ月目に
- ・人民の闘い、二人死亡四一人負傷。
- ・追放者、ハンストと抗議デモ(資料参照)。
- ・シリア・ラジオ、リクードのゴランでの大会  
開催を強く非難。
- ・ペイルート、五・一七協定一〇周年、數千人がデモ、交渉を非難、武装闘争を。内相も、イスラエルが五・一七合意のコピーを押しつけていると非難。南部、レジスタンスの攻撃
- ・ペレス、インド訪問。パレスチナ&インド半生二〇〇〇が抗議デモ。
- ・米国高官、中東政策で問題発言(本文参照)
- 五月一八日
- ・人民の闘い、五人死亡三五人負傷。
- ・クリストファー、下院の外交委で、和平過程の進展のなさに不満表明。
- ・南部、レジスタンスの攻撃。イスラエル兵人死死亡三人負傷。
- 五月一九日

五月二〇日 首都、交渉の対象ではない。

・シャフィ、ラビン発言に反発。交渉は停止し、二四一、三三八に基礎を置くべき。イスラエルは占領者たる事實を認めず、エルサレム問題、入植活動は和平交渉の障害。米国をも批判。アラファト、PLOの財政問題のため、人質を整理し、リビア南部のキャンプに送る。

五月二二日

・人民の鬭い、五人負傷。ガザ、軍への手投げ弾、兵二人負傷。他方、訪問中の国際赤十字総裁、被占領地のあり方はジュネーブ条約違反と非難。

・PNC議長辞任を発表。和平過程への参加になんら利益はない（本文参照）。

・南部、レジスタンスの攻撃、ゲリラ一人、S LA一人死亡二人負傷。

五月二三日

・ファタハ＝ハマス、共同声明（本文参照）。

・シャフィ、交渉参加は軍事的鬭いの放棄を意味しない。

五月二十四日

・人民の鬭い、二人死亡。ガザ、数百の子供たちと母親たちが国際赤十字前で座り込み、ガリラヤに占領軍の弾丸からの人々と子供たちの保護を訴え。他方、イスラエルの人権運動も殺人と家屋破壊を非難。エルサレムでは爆弾事件。

・フェイニ、気の進まない交渉者は辞任すべき。ゼネストはやめ、経済再建を（ファタハ内部

の矛盾の現れ?」。

- ・アシュラヴィ、エルサレムを含む被占領地は一つ。土地、課題などの分割策動に反対する。

- ・ある交渉者は、PLOに代わる指導部創設の試行があり、交渉反対者は選択を（本文参照）。
- ・南部、イスラエル兵が同士討ちで四人死亡三人負傷（本文参照）。

#### 五月二五日

- ・南部、レジスタンスの攻撃三つ、SLA一人負傷。

#### 五月二六日

- ・米国務省高官の問題発言（本文参照）。

#### 五月二七日

- ・アラファト、イスラエルのかたつな対応と米国の偏ったあり方は交渉を破綻へと導く。
- ・アムネスティ、被占領地での軍の殺傷、人権侵害、家屋破壊、集団懲罰を非難。
- ・アル・アハラム夕刊、ムバラクの米国批判発言（本文参照）。

#### 五月二八日

- ・ヘブロン地区、入植者を殴り殺し、ピストルを奪取、軍は、外出禁止令を施行。ガザ、軍への発砲二件。

#### 五月二九日

- ・西岸、イスラエル観光バスに手投げ弾。他方、入植者の乱暴。

#### 五月三〇日

- ・ガザ、軍がハマスの二人を殺し、一人逮捕、この際五家屋以上破壊。西岸、入植者の暴行拡大、発砲で三人を負傷させる。

・南部、レジスタンスの攻撃。

- ・イスラエル総省、封鎖は経済成長を下げ、インフレを拡大し、九三年には一七%に上る。

#### 五月三一日

- ・西岸、入植者がアラブ車やモスクに発砲一人死亡一人負傷（インティファーダ以降一〇九五人、五月の死者五〇人）。
- ・リビア巡礼団エルサレムへ（本文参照）。

#### 六月一日

- ・西岸、ヘブロン地区でハマス二五人逮捕。各地で連日大量逮捕。

#### 六月三日

- ・ファハド、アドハ演説（本文参照）。

#### 六月四日

- ・米国、パレスチナの質問への文書回答を拒否。マジャリヨルダン新首相、年内に大きな进展がある。

#### 六月五日

- ・南部、レジスタンスの攻撃。

#### 六月六日

- ・ガザ、手投げ弾攻撃、兵一人負傷。

#### 六月八日

- ・ガザ、一人射殺された。

#### 六月九日

- ・パレスチナ代表団米国との討議のため訪米。

#### 六月十日

- ・アラファト、米国のあり方を批判しつつ、和エル援助の再考を。

#### 六月十一日

- ・被占領地、軍の無差別発砲で一人死亡、人民の鬪い四人負傷。ガザ、六七年戦争の記念日、アラブ側ユダヤ側双方から約一〇〇〇人が占領、封鎖抗議の集会。爆弾攻撃で、兵一人負傷。

・前線諸国外相会議（アンマン）、マジャリやムサは楽観的と強調、他方、ブエズ、第九次

- ・必要なものを満たしたとは考えていない。
- ・南部、レジスタンスの攻撃。

#### 六月八日

- ・ペレス、ヨルダンとはサインのためベンをとるだけ。これに対して、パレスチナ、ヨルダン側は、分断のための発言であり、パレスチナの解決ぬきに和平はない。

#### 六月九日

- ・南部、レジスタンスの攻撃二つ。イスラエル兵四人負傷、SLA一人負傷。

#### 六月一〇日

- ・クウェート、アラブ・ボイコットの「解除宣言」。

#### 六月一一日

- ・米国際援助機関新責任者、エジプト、イスラエル援助の再考を。

#### 六月一二日

- ・パレスチナ代表団米国との討議のため訪米。

#### 六月一三日

- ・アラファト、米国のあり方を批判しつつ、和平過程を継続と交渉達成への決意を強調。

#### 六月一四日

- ・南部、レジスタンスの攻撃、SLA一人死。

#### 六月一五日

- ・この後、SLAが地区長と少女を誘拐。

#### 六月一六日

- ・ラビン（パレスチナ紙との初のインタビュー）、エルサレムはイスラエルの一部だが、住民の選挙権は認めてよい。軍は入植地周辺など

- ・イスラエル市民の安全に責任をとり続ける。軍の行動は正当であり、追放は効果的。

- ・アル・ハヤト紙、パレスチナとイスラエルは欧州の都市で秘密交渉。エジプト、オーストリアが大きな役割。